



え・たむらかづみ

# 立ち止まり 振り返る契機に

**あ**る地方で五軒のクリーニング店を営むYさんは、子供の頃から、「健康であること」が何よりの自慢でした。滅多に風邪もひきません。

そんなYさんも、年齢を重ねて、疲れを感じるようになってきました。特別にどこか具合が悪いという自覚はなかったのですが、妻の勧めもあり、初めて人間ドックを受診することになりました。五十五歳の誕生日でした。

〈何か見つかるかな…〉という一抹の不安がよぎったYさん。その予感的中しました。胃に、ポリープが三つ見つかったのです。医師からは、「癌の可能性もあるので、念のため切除して、調べてみましょう」と言われました。

翌週、内視鏡手術でポリープを切除。検査の結果、やはり癌という診断でした。幸い早期に切除できたため転移はなく、経過観察をすることになりました。

この結果は、Yさんにとってショックでした。健康への自信が、癌という言葉聞いて、ガラガラ

と崩れていったのです。

不安を覚えたYさんは、倫理学会の講師に、倫理指導を受けることになりました。じつと話を聞いていた講師は、Yさんにこのように告げました。

「Yさん、モーニングセミナーで読む『万人幸福の栞』には『病気は生活の赤信号』とありますね。いったん立ち止まって、今までの仕事や人間関係、家族のことなど生活全般を振り返りながら、誤りを正して先に進むことです。何か思い当たることはありませんか」

その言葉に、Yさんはハッとしました。これまで健康が自慢でも、健康であることに感謝したことはありませんでした。また、仕事でガムシヤラに突き進んできたYさんを支え、食事面でも気を配ってくれていた妻の健康を気遣う余裕もなく、店が忙しいことを理由に、子供たちを旅行に連れていったことも皆無でした。そして、一所懸命働いてくれている従業員にも、感謝の言葉一つかけたことがなかったのです。

「どうやら私は、いろいろなことに感謝を忘れていたようです。これでは病気になるのは当たり前ですね。でも、今が良くしていくチャンスなのでですね。まず、家族に感謝を伝えることから始めます」と、実践を誓ったYさん。自宅に戻ると、早速妻に、これまでのお詫びと、支えてくれたことへのお礼を告げました。子供たちにも「今までありがとう」と伝えました。皆キョトンとしていました。その後の笑顔に、嬉しさが表われているようでした。

それから五年が経過しましたが、再発も転移もなく、医師からは「もう大丈夫でしょう」というお墨付きをもらいました。今は、健康に育ててくれた両親に感謝し、家族や従業員には、折々に言葉で感謝を伝えているYさんです。

身に降りかかった苦難には必ず意味があります。〈この苦難は自分に何を教えてくれているのか〉と謙虚に受け止め、実践を通して、より良い人生を過ごすための糧としていきたいものです。